

主な出展リスト

◆アンティークプリント

- AP-188 「ハイマーケット劇場」イギリス / 1816年
- AP-189 「オペラ座」フランス / 19世紀
- AP-231 「オペラハウス」イギリス / 1809年
- AP-234 「ユージン・ゲラルド」ダンス・演劇年報」フランス / 19世紀
- AP-081 「フルチネッタとグロテスク」劇場特別展」フランス / 1823年
- AP-174 「ローラ来た！アメリカの観客による熱烈歓迎」アメリカ / 1852年頃
- AP-187 「ネズミ達（オペラ座）」フランス / 1854年
- AP-223 「オペラ座」フランス / 1840年
- AP-005 「舞台裏のダンサーと紳士」ポール・ガヴァルニ画 / フランス / 19世紀
- AP-178 「劇場にて」ビエール・ヴィダル画 / フランス / 1900年頃
- AP-108 「オペラ座の楽屋」ウジェーヌ・ラミ画 / フランス / 1844年頃
- AP-122 「主演ダンサーと称賛者達：キングス劇場の舞台裏」ジョセフ・グレコ画 / イギリス / 1822年
- AP-198 「オペラ座のホワイエ」アンリ・ドゥ・モンドー画 / フランス / 19世紀
- AP-020 「ファニー・エルスラー」画家の譫妄 (In Des Malers Traumbild)」オーストリア / 1843年
- AP-088 「アドルフ・アダン」大理石の乙女 (The Marble Maiden)」イギリス / 1845年

◆小物類

- B-01 ボリショイ劇場 100周年記念バッジ / ロシア / 1925年 (1825-1925 / T. P. Pereyaslavcheva / No. 99)
- ST-TR-01 ボリショイ劇場記念切手 / ロシア / 1965年
- PC-1305 ボリショイ劇場ポップアップカード / ロシア / 1999年
- 参考資料 バリ・オペラ座ポップアップカード / フランス / 2000年代
- 参考資料 ポップアップ絵本「バレエ」クレイグ・ドッド著 / フランス / 1988年 (Dodds, Craig "Le Ballet" Sardie Fields Productions Ltd. 1988)

◆主要参考文献

- * 鹿島茂「職業別パリ風俗」白水社 1999年
- * 鈴木島編「バレエとダンスの歴史～欧米劇場舞踊史～」平凡社 2012年
- * 中野京子「ドガ「エトワール、または舞台の踊り子」」『飾り絵』角川文庫 2015年
- * 芳賀直子「ヴィジュアル版バレエ・ヒストリー～バレエ誕生からバレエ・リュスまで～」世界文化社 2014年
- * 渡邊守章編「舞踊評論～ゴッティエ、マラルメ、ヴァレリー」新書館 1994年
- * Craine, Debra & MacKrell, Judith "The Oxford Dictionary of Dance" Oxford University Press 2000

薄井憲二氏、ロシア「踊りの魂賞」受賞！

この度、薄井憲二氏にロシアの舞踊誌が主催する「踊りの魂賞」(ロシア・バレエ振興特別賞)が贈られる運びとなりました。ロシア出身者以外では初の受賞です。

薄井氏は東京大学在学中に出征され、4年間のシベリア抑留生活中にロシア語を習得。1949年に帰国後は、ダンサー・指導者・舞踊史研究者として、日露/レエ界の交流・発展に尽力されてきました。「少年時代にストラヴィンスキーの『火の鳥』を聴いて衝撃を受け、その憧れは抑留中も消えなかった。ロシアの文化の深さには感謝しかない」(薄井氏談)。授賞式は4月末、ロシアのダンチェンコ音楽劇場にて開催されます。

Kenji Usui Ballet Collection

“The Theatre : Front and Back of the Stage”

～ as if to peek a frame ～

2016/4/19 (Tue.)～2016/5/22 (Sun.)

◎ 企画・監修

関 典子(せき・のりこ)／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊史研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

多賀成美(たが・なるみ)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター

Narumi Taga (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
2016企画展

劇場展：舞台の表と裏

～ 額縁を覗くように～

2016/4/19 (Tue.)～2016/5/22 (Sun.)

皆様は、劇場という空間に、どんなイメージをお持ちでしょうか？ オペラ、コンサート、演劇、そして、バレエ。出演者の高い技術や華やかなオーラ、きらびやかな舞台装置、豊かな音楽性……。一言でいえば、日常とはかけ離れたひとときの夢の世界、非日常の空間が、最大の魅力の一つと言えるでしょう。とりわけ、「プロセニウム・アーチ」と呼ばれる額縁で囲まれている舞台形式では、観客はまるで額縁の中の絵のように舞台を眺めます。19世紀のロマンティック・バレエ時代は特に、妖精達の舞う夢幻的な世界が展開されていました。同時に、「バレエは美しい女性の陳列に過ぎない」と、芸術的価値を軽んじられる風潮も現れ始めていました。

本展では、当時のアンティークプリントを中心に、「劇場空間」「舞台裏」「バレリーナの肖像」に焦点を当て、その実態に迫ります。さあ、額縁を覗くように、舞台裏のバレエの世界へと、足を踏み入れてみましょう。

“The Theatre : Front and Back of the Stage”

～舞台裏の社交場、 ホワイエ・ドラ・ダンス～

～額縁としての舞台～

ヨーロッパの伝統的な劇場は、馬蹄形の平土間(1階席)、貴賓用のボックス席(棧敷席)、一般用のバルコニー席、最上階の天井棧敷と、複層的な客席構造になっています。そして、オーケストラ・ボックスとプロセニウム・アーチ(額縁状の枠組み)の存在によって舞台と客席とは完全に分離され、観客は舞台で行われていることを、透明な「第四の壁」を通して、まるで額縁を覗き込むようにして観ることになります。重厚な緞帳が開いて繰り広げられる非日常的なバレエの世界を、まるで一幅の絵画を鑑賞するかのよう愛でる。古今変わらぬ劇場の魅力です。



こうしたボックス席の客は、上演中であっても自由に楽屋や舞台袖に入出入りする権利を持っていました。高額な年間定期券(アボネ)の購入特典として「ホワイエ・ドラ・ダンス」と呼ばれるウォーミングアップエリアが開放されたのです。若くて美しい女性ばかりの舞台裏に入れることは大きな魅力だったことでしょう。当時観客の大半を占めていた紳士達は、お気に入りのダンサーに贈り物をし、食事に誘い、場合によってはより深い関係になるということも起きたとか。当時の批評家の言葉を借りれば、「オペラ座は上流階級の男達のための娯館」のような一面も持ち合わせていたのです。当時の新聞や雑誌にはこうした風景が掲載されており、それが庶民の憧れの世界であったことを物語っています。



～オペラ座のネズミ?～

舞台に立つバレリーナ達をボックス席から熱心に見つめる紳士の図。この絵には「ネズミ達(オペラ座)」というタイトルがつけられています。「ジゼル」などのバレエ台本も手がけた詩人テオフィル・ゴーティエによると、「オペラ座ネズミ」とは、8～15歳のバレエ学校の生徒達のこと。劇場の中をネズミのようにチョコマカと走り回り、いたるところでおやつを齧っているところから、その名がつけました。この時代、プリンシパルやソリストのほとんどは中産階級以上で劇場に関係する家族の出身であることが多かったようですが、一方のコール・ド・バレエ(群舞)は下層階級の出身者が多く、生活のために入団する事例が圧倒的に多かったと言われていました。当時のバレリーナは、芸術を極めようとする良家のお嬢様ではなく、家族の期待を一身に背負って、極貧から



健気に這い上がろうとする労働者階級の娘達だったのです。ネズミ達が学ぶのはバレエの技術だけではなく、大事なのは端役のうちに上流階級のパトロンを探してより大きな舞台に売り込んでもらい、スターになること(当時はパトロン達がバレエの演目を決定することすらありました)。一見華やかな当時の舞台の、これが内実だったのです。

～もう一つの額縁? ボックス席～

もう一つ、この時代の劇場の大きな特徴が、ボックス席(棧敷席)の存在です。平土間をぐるりと囲む小部屋のようなボックス席は、近代的な劇場にはない、贅沢な空間です。お洒落をしてあそこに座ってみたい……そう憧れる人もおられるかもしれませんが、ところが、当時の絵画を見てみると……

この頃の劇場は、観客が舞台のみに集中する現代とは異なり、社交場としての性格が強かったようです。ボックス席は文字通り箱の中のような空間で、最前列以外は舞台が見えづらく音楽も聞こえづらい、舞台鑑賞には不向きな場所であったにもかかわらず、一番ステイタスの高い席でした。なぜなら、舞台に近いこの席は、他の観客から最も視線を集める場所であり、たとえばナポレオン3世はパリ・オペラ座に専用のボックス席を持ち、他国の君主を接待したり、他にも富裕な貴族や紳士達が定期予約し、お見合いの場に使ったり来客をもてなしたり、劇場内の別宅のように利用していました。飲食も自由にカーテンを閉じればそこで何をしようと構わなかったとか。当時の絵にも、舞台ではなくボックス席を覗き込んでいる観客の姿が描かれています。



～憧れの存在としてのバレリーナ～

このように、19世紀のアンティークプリントは、「舞台上の栄光」と「舞台裏の現実」といった劇場の持つ二面性を今日に伝えてくれます。現在からは想像しにくい事柄に、驚かれた方もおられるかもしれませんが、しかし、何よりも強調したいのは、それらは全て「バレリーナの魅力」に起因することだった、ということです。

—— バレリーナに要請されるべき第一条件は美である。それを忘れてはならない。バレリーナは、美しいことにどんな言い訳も持たない。女優が正しくない発音を非難されるように、人はバレリーナに醜い容姿をとがめることができる。ダンスとは、身体の線の展開にあった様々なポジションのもとに、優雅で精緻なフォルムを見せる芸以外の何ものでもない。踊り手を志す者は、従って必然的に、完璧とは言わなくても少なくとも魅力ある身体を持っていなければならない。(テオフィル・ゴーティエ『ラ・プレス』誌 1837年11月27日より抜粋)

ある種「絵画的な描写」とも言えるゴーティエのこの言葉からは、彼がダンスを「美しき瞬間の連続」として捉えていたことが伺えます。当時流行していたリトグラフは、憧れのダンサーをいつでも見ることのできるプロマイドのような存在として人気を博していました。絶対的な美を求められるバレリーナは、人々にとっての理想像であり、憧れの存在だったのです。

舞台という額縁を挟んで対峙する「主体:男性:観る側」と「客体:女性:観られる側」の存在。しかし、この二項対立は、「窃視者、支配者としての観客の男性性」と「観られ、パトロンによって庇護されるバレリーナの女性性」という図式のように集約されるものではありません。そこには確かに「美」が存在し、バレリーナ達のたゆまぬ努力と観客の審美眼によって様々な名作が生まれ、今日でも、私たちを楽しませてくれているのですから……。

